

## 企業インターンシップ(先進理工学専攻 進取科目4単位)

### 先進理工学専攻3年(LD3) 加藤 遼

昨年度の2月から、アメリカ・オハイオ州にあるプリヂェストン・アメリカで約3ヶ月間、企業インターンシップを行いました。

当初は、本プログラム初の海外インターンシップ、ハイウェイを使った自動車通勤、現地スタッフはほぼ全員日本人以外、さらに自分は英語に苦手意識を持っている、と、インターンシップ参加を決意するには、不安な気持ちの方が大きかったというのが正直なところです。それでも今回海外インターンシップを決意できたのは、コロキウムでCase Western Reserve大学の石田初男先生が仰っていた“機会は矢のように目の前を通り過ぎる。人生の展開を恐れるな”という言葉がとて大きく心に響いていたからです。あの言葉を信じて一歩を踏み出して本当に良かったと、今では強く思っています。

実際にインターンシップ生活が始まって最初の一か月は苦悩の連続でした。受け入れ先だったプリヂェストン・アメリカで与えられたのは研究のコンセプトと達成すべき目標のみで、あとは自分で自由にやっていたと言われました。この“自由にやっていた”ということが始めはとて辛く感じたことを覚えています。研究計画の立案はもちろん、論文・試薬の発注、サンプルの解析依頼、装置の講習や使用申請等もすべて自ら周りに聞いて歩かないと何も進まない状況でした。さらに、会社以外の日常生活でも、例えばレンタカーやアパートの手続き、毎日の買い物やガソリンの入れ方など、日本では何ともないことがとて大変で、毎日が一杯一杯でした。

しかし、今ではこの怒涛の一か月で辛く感じたこと、学んだことこそが今回のインターン生活で最も貴重な経験になった気がします。自由な場の中で学んだのは“自分で動き、自分で周囲の環境を変えていくことの大切さ”でした。必要に迫られた環境の中で、インターン後半では積極的にコミュニケーションを自らとるように心がけ、チャンスは全て活かすように努めました。インターンシップが辛さではなく楽しく感じるようになったのはこの頃からだったと思います。次第に社員の人たちとの距離も近づき、夕食やゴルフ、ホームパーティーなどにも誘ってもらえるようになり、また、交流を深めることで研究に対するアドバイスや難し

いサンプルでも解析をしてもらえるようになり、毎日が充実したものと変わっていききました。

また、実際に現地で働いていた日本人社員の方々と出会えたのも大きな転機となりました。現地の文化やコミュニケーションに完全に入り込み、指揮を取りながら周囲を先導していく、その姿を間近で見ること、インターン前までぼんやりとしていた“グローバルリーダー像”が、より明確なものへと変わっていききました。

その国の文化を知るだけでなく、その中に入り込める人が“グローバル人材”であり、その実践演習にトライできるのが海外インターンの最大の強みだと思います。海外で研究・生活するということがどういことなのか、身をもって知ることができたこの3か月のインターンシップは私にとって非常に掛け替えのないものとなりました。自分の考え方や視野が大きく広がる、そんな貴重な経験とさせていただいた本プログラム関係者と、最後まで親身にご指導いただいたプリヂェストンの皆様に心より感謝いたします。また、海外インターンに行くことを悩んでいる人は、ぜひ思い切って一歩を踏み出してみてください。



▲新規触媒を使った重合実験



▲インターンシップの集大成となる発表(左から:プリヂェストンアメリカ研究所社長、プロジェクトリーダー、マネージャー、加藤)

### ミシガン実践的英語演習

- 2014年8月1日(金)～9日(土)  
ミシガン大学アナーバー校(アメリカ)

欧文専門学術論文誌や国際会議で成果発信できる論理構成力やテクニカルライティングおよびプレゼンテーション法を取得することを目的として、2期生を中心に20名の学生が集中講座を履修しました。上記の加藤さんも、昨年度に本演習を履修して、スキルアップを図った1人です。



▲マンツーマンでの指導